

「雪 月 花」

文芸学部長 塚 野 耕



「雪月花」と揮毫した額を、飾り戸棚に掛けている古書店があります。いつもその佳句に感じ入ります。この三文字は、ほぼ私と同じ年齢のころに白居易が詠んだ七律「寄殷協律」に由来し、四季折々の自然美の総称として用いられるようになりました。しかし、原詩が「琴詩酒友皆抛我 雪月花時最憶君」であるように、友を失った人間の孤独、真の友を求める狂おしさとそれは共存するものでした。狂おしいがゆえに雪月花に戯れるというものです。この戯れを風狂と名付けましょう。花の下での、そしてまた月の下での宴は、西行ならずとも「寂しさに堪へたる人」の狂いなのです。潤一郎の随筆ともいえる「月と狂言師」は、月下狂宴の好例となります。

文芸の根本に風狂があります。「物學^{ものまね}」のうちでもことに「物狂^{ものぐるひ}」を世阿弥が力説します。これを会得すればあらゆる面で力を発揮することができるから、「心を入れて狂へ」と『風姿花傳』で教えました—「思い故の物狂いをば、いかにも、物思ふ氣色を本意に當てて、狂ふ所を花に當てて、心を入れて狂へば、感も、面白き見所も定めてあるべし。」と。生涯において世阿弥が出会った生の悲しさの詳細を私は知りませんが、現実世界に「実」のないことを知り尽くしていたであろうことは、弟子禪竹が『拾玉得花』に書きとめた師の教えである次の一節の中にある、「そうであるにもかかわらず」の意味をもつ文言「けれ共」に透けて見えます—「物狂なんどの事は、恥をさらし、人目を知らぬ事なれば、是を當道のふし物に入るべき事はなけれ共、申樂事と

は是なり。」本来が「恥をさらす異常な戯れである「物狂」をあえて演じることによって、「虚」である現実を「実」である小宇宙に組み換え直そう、創り直そうとするのです。

孤独の自己を客観視しようとする時の芭蕉をかりたてた「漂泊の思ひ」もまた、「狂」でありました。紀行文のほとんどが、その冒頭に「狂」の字を据えていることで、そのことは明らかです。「狂夫のむかしもなつかしままに」(『鹿島詣』)、「かれ狂句を好こと久し」(『笈の小文』)、「ともに風雲の情をくるはすもの又ひとり」(『更科紀行』)、「そぞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取る物手につかず」(『奥の細道』)と続きます。詩人の心をももの狂おしくする「そぞろ神」とは、「栖去之辨」の言葉を借りれば「風雅の魔心」であり、白居易に言わせれば「詩魔」に当たります。

「風雅の魔心」といい、「詩魔」といい、それを西洋風に言えば「想像力」(imagination: vision)です。「想像力で頭がいっぱいになっている」「詩人の眼は、うるわしい狂気の中で回転する」(“The poet's eye, in a fine frenzy rolling”)とシェイクスピアが言いました。雪月花の三文字を見るにつけ、「心を入れて狂」った遠き世のうたびとたちを偲びます。

(文学科英米文学 教授)